

### 平成22年度 第2回薬物乱用防止 講演会を開催

平成22年12月9日、14日、15日の3日間、学生支援部は第2回薬物乱用防止等安全指導講演会を実施し、556名の学生が参加しました。

今回の講演は、文教・坂本・片淵の各キャンパスで行うことにより、多くの学生に薬物乱用の危険性を認識させ、薬物乱用防止の意識の向上を目的として実施したものです。



講話する中島先生



薬物乱用防止講演会(文教キャンパス)の様子

12月9日には、坂本キャンパスの医学部記念講堂にて、大学教育機能開発センター副

センター長の高橋正克先生が、12月14日には、文教キャンパスの中部講堂にて、医歯薬学総合研究科の中島憲一郎先生が、12月15日は、片淵キャンパスの経済学部講堂にて、医歯薬学総合研究科の和田光弘先生がそれぞれ講話しました。

現在、流行している違法な薬物についてと、その実状や薬物乱用の危険性を中心に講話していただき、その派生的な観点から違法な薬物についてアプローチしました。講演会に参加した学生たちは、あらためて薬物乱用の弊害とリスクを再認識した様子でした。

### 業務改善提案 公募制度を創設

長崎大学では、「業務改善提案公募制度」あなたが変える、私たちの職場」を新たに創設し、平成22年11月から12月の約2カ月間、全事務職員を対象に業務改善

提案を公募しました。

この制度は、職員の業務改善に関する意識を喚起するとともに、改善提案の実現に努め、継続的に業務改善に取り組むことにより業務の効率化や質の向上を図ることを目的としています。

公募にあたっては、本制度を所管する総務企画課の若手職員5人が推進チームを結成し、文教、坂本及び片淵の各キャンパスにおいて説明会を企画・開催するとともに、説明会における質疑応答をデイリーメールと称して連日全事務職員にメールするなど、制度の周知、改善意識の醸成に努めました。その結果、募集期限までに69件もの業務改善提案の応募がありました。

今後、役員、事務局長、部長、学内から公募した審査員、外部有識者で構成される審査会において審査を行い、採択された提案は、平成23年4月よりその実現が図られます。

なお、特に優秀と認められた提案については、学長表彰などを行います。



説明に聞き入る参加者

### 済州大学校 (大韓民国)との間の ダブル・デイグリ プログラムに関する 覚書を締結

本学は1月7日、済州大学校との間にダブル・デイグリ・プログラムに関する覚書を締結しました。

長崎大学からは片峰茂学長、橋本健夫理事、石松隆和工学部教授その他の関係者立ち会いのもと、済州大学校において、片峰茂学長とHuh Yang-Jin 済州大学校総長が調印式を行い、ダブル・デイグリ・プログラムに関する覚書が締結されました。

済州大学校とは、1991年2月に学術交流協定を締結、1992年からは共同学術シンポジウムを開催しました。2007年11月には両大

学間の交流の活性化の一躍を

担う、長崎大学―済州大学校交流推進室(済州大学校内)を設置し、2009年6月に学術交流協定に基づく学生交流に関する覚書を締結。2010年6月の共同学術シンポジウムにてダブル・デイグリ・プログラムに係る締結へ向けた協議を開始し、今回、工学研究科(平成23年4月)との間での実施に向けた覚書の締結となりました。

今後も、国際シンポジウムの開催など更なる人的交流及び学術交流を推進するとともに、大学院生間での交流の活性化が期待されます。



Huh Hyang-Jin 済州大学校総長と片峰学長



済州大学校関係者との記念写真

**グレートレークス大学  
キスム校(ケニア共和国)  
ダン・クレメント・オウイノ・  
カセジエ学長が表敬訪問**

1月26日、グレートレークス大学キスム校のダン・クレメント・オウイノ・カセジエ学長が片峰学長を表敬訪問されました。

同大学長は、本学国際健康開発研究科の招聘により、本学国際健康開発研究科における特別講義「Primary Health Care Perspectives : Global Regional Kenyan」の講演、および研究交流を行うため来日されました。

片峰学長との懇談では、本学側から国際健康開発研究科の神谷保彦教授と富田明子教授が出席し、在ケニア本学海外教育研究拠点における活動および今後の相互交流について、意見交換が行われました。



懇談風景



記念撮影

**長崎大学病院  
開院150周年記念事業  
県民公開講座を開催**

1月29日、大学病院は長崎ブリックホールで県民公開講座を開催し、医師たちが身近にできる生活習慣病やがんの予防方法について講演。健康に関心の高い約200名の方が参加しました。

まず、はじめに、保健・医療推進センターの山崎浩則准教授が、「動脈硬化は小学校4年生から始まっていて、自分の血管年齢が年相応であることが重要です」と話す中、会場から驚きの声があがり、「自分の体を取材して、できることを淡々と続けましょう」と

強調しました。

続いて、がん診療センターの芦澤和人准教授が、「がんは遺伝だと思われているようですが、実は生活習慣病のひとつ」とし、「早期発見できたら、半分の方は治っています」とがん検診の受診を呼びかけました。

パネルディスカッションでは、代謝内科医の阿比留教生講師が、「電停から電停までの距離をこまめに歩くよう心がける、電車療法や大型スーパーをぐるぐる歩き回る、スパー療法がおすすすめ」と身近にできる運動を、笑いを交えながら伝授しました。管理栄養士の篠崎彰子室長は、「ハンバーガーやフライドチキンが悪者ではなく、食べ方が悪いだけです。油を制限しては、シワになりますよ。自分に合った食事を上手にとることが大事です」と、誤った認識を指摘しました。

パネルディスカッション終了後には、健康相談コーナーが設けられ、参加者は血管年齢や血圧測定などを行い、有意義な講演となったようです。

**WHO  
神戸センター所長が  
片峰学長を表敬訪問**

2月10日、WHO神戸センターのジェイコブ・クマレサン所長が片峰学長を表敬訪問されました。

同所長は、公衆衛生の専門家であり、歯髄学総合研究科における大学院セミナー

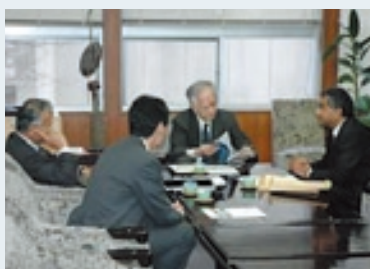


会場の様子



健康相談コーナーの様子

「Overview and current activity of WKC」の講演のため本学を訪問されました。片峰学長との懇談では、本学側から山下俊一歯髄学総合研究科長及び高村昇同研究科教授も同席し、WHO神戸センターの活動、本学にあるWHOコラボーティングセンターの活動、またWHO神戸センターのインターンシップ制度などについて、意見交換が行われました。



懇談風景



本学関係者との記念撮影